

『オーガニック 有機農法、自然食ビジネス、認証制度から産直市場まで』

ロビン・オサリバン 著

Robin O'Sullivan, *American Organic: A Cultural History of Farming, Gardening, Shopping, and Eating*. University Press of Kansas, 2015.

国際領域 政策研究調査官 後藤 正憲



原題にAmerican Organicとあるように、本書は、アメリカ合衆国を舞台としてオーガニック農業が生み出され、今日広く認められるような社会的位置づけを得るに至った歴史的経緯を、生産、販売、消費の幅広い視点から捉え直す内容になっています。「訳者あとがき」にあるように、一般にオーガニックに関しては時間軸が重要な役割を果たしています。私たちがオーガニック製品を手にとるとき、それがいかに生産されたかを想像し、それを消費することで自分の健康や地球環境にどのような影響があるかということを予想します。つまり消費者は、過去と未来に伸びる時間軸上に展開される「物語を買っている」(本書 p. 367) ことになります。この時間軸上の物語は、個々のオーガニック製品のみならず、オーガニック運動全体にも見いだされます。本書において著者は、該当する図書や雑誌、新聞記事、批評、広告など、膨大な数の文献から、オーガニックの物語を紡ぎ出しています。

物語の起点は1940年代にさかのぼります。DDTの例に見るように、戦争で余剰となった化学薬品が、農薬や除草剤、肥料として用いられ、戦後には食料増産の必要から、その利用が政府によって積極的に促進されました。こうした化学農法に対するアンチテーゼとして現れてきたのが、農薬や化学肥料を使わず、堆肥を使って作物を育てるオーガニック農法です。農業政策の主流は化学農法にありましたが、その向こうを張るオーガニックは、公民権運動やベトナム反戦運動を背景として広がったヒッピー文化とともに、カウンター・カルチャーに融合していきます。J. I. ロデイルを始めとするオーガニック農業の主導者たちは、農務省や化学産業界から煙たがられ、また医学者や栄養士などの専門家から厳しい批判を受けながらも、自然との調和を重視したオーガニック農業を広めていきます。

この、化学農法とオーガニック農法を推進する者同士の対立が、本書前半の主要なテーマとなっています。著者はそのどちらに肩入れすることもなく、あくまで中立的な立場から論争を追っていきます。

概して、オーガニックで育てた作物が健康によいとする主張は、非科学的で明確な根拠に欠けるとして退けられ、添加物や農薬に含

まれる有害物質は極めて微量なために、人体に影響はないとされました。このことから、科学的根拠があるかないかということと、物事が正当化されるか否かということは、本来別の話であるはずなのに、しばしば一緒にくたにされるということが思い知らされます。

1970年代から80年代になると、オーガニック素材を使ったレストランが増えるとともに、オーガニックのイメージが高級なものに変化していきます。また、それまで有機作物の販売は、農産物直販所や自然食品店に限られていたのが、大型スーパーマーケットでも扱われるようになります。それにともなって、慣行の農産物に比べると割高のオーガニック製品については、曖昧な表示や偽装などの不正が横行するようになりました。そうした不正を抑えるためにも、全国統一基準が求められることになります。1990年には有機食品生産法 (OFPA) が定められ、有機認証の基準や申請内容を審査するための委員会が立ち上げられました。こうして法制化されることによって、今やオーガニックは農産物において不動の位置を獲得することになるのですが、同時に、生産の現場と消費が強く結びついて得られていた、オーガニック運動本来の力は失われていくことになります。

本書の後半では、こうした慣習化や商業化によってオーガニックの取り組みに現れた変化が、主題となっています。近年、環境政策の一環として立てられた「みどりの食料システム戦略」では、有機農業の割合を増やすための様々な数値目標が掲げられています。本書で描かれるような定式化のジレンマに陥らないためにも、本来のオーガニックのあり方をもう一度しっかりと見つめ直すことが、私たちに求められるでしょう。

『オーガニック 有機農法、自然食ビジネス、認証制度から産直市場まで』
著／ロビン・オサリバン
訳／浜本隆三・藤原崇・星野玲奈
出版年／2022年
発行所／築地書館